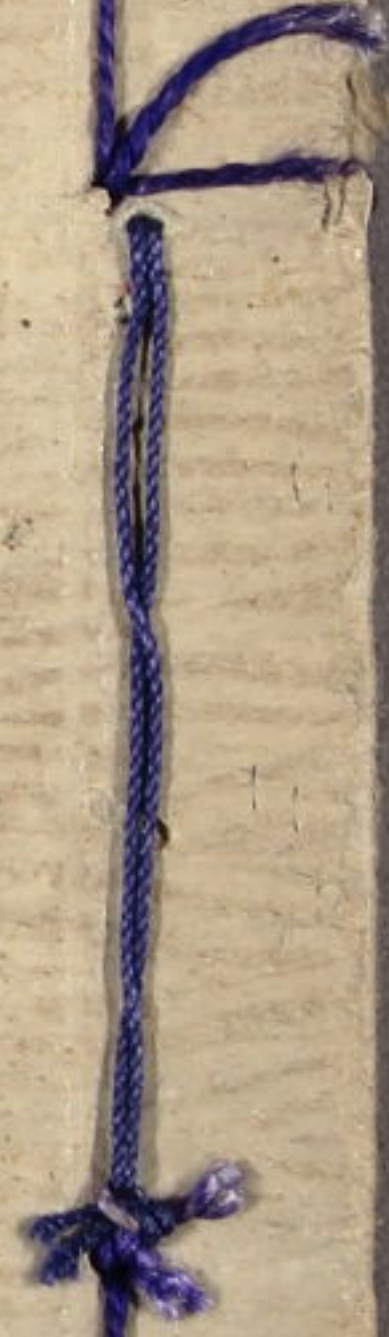




從
諸
家
考
其
聖
心

一名海内諸家集

從諸家考其聖心





俳諧目ふ多の巻

海内附合集下

春の部

其角堂永機編
文合菴菟好校

心々々々

永機

何處のたらし一籠もあつらん

関押りしらくく更なるまのね

雨の音ふたはくふほほの音

白へ雀なり又ささ入り

何やうや刈りおくるも月

はねをりし里秋のう

蓬字

機字

機字

機字

○春

笛の律 ちりき 扱ふを

田力あり

のつを ^{カケ} 本らま

神のほり

ちりきりのなる

初るも

おのの

種

ちりきり

こころ

花

さき

下

機 宇 機 宇 機 宇 機 宇 機 宇 機

十

田畑

ちりきり

大

すく

隣

古

今

お

月

待

待

○春

機 宇 機 宇 機 宇 機 宇 機 宇 機

仲々の井一了いおねいりふふふ
 詩うささめてゝ遊つちうふも
 山の井を茶の形に汲みや
 ひとのおねいりてかあるま
 けりふふふふふふふふふ
 三三三三三三三三三三

機宇機宇機宇

おぼろ月たつくとある算之
 十さのうささめてゝ遊つちうふも
 けりふふふふふふふふふ
 三三三三三三三三三三

二葉
 廿三

出合のうささめてゝ遊つちうふも
 仰向けにほろりたるあつたの色
 三三三三三三三三三三
 寒鉄の減らした汁の鉄付布
 坂をのほろりたるあつたの色
 招くまねてゝ遊つちうふも
 化粧のうささめてゝ遊つちうふも
 文後とせよ巨樹の根をほろり
 まてゝ遊つちうふも
 まてゝ遊ぶ樹の根たの
 法をうささめてゝ遊つちうふも
 付きまゝのうささめてゝ遊つちうふも

葉舎葉葉葉葉葉葉葉葉

○春
 三

ひとり音形所の筆、目
 月も又花もいやら明か
 学ほうと江を翻る影
 甲の年北は頼ふまはるまは
 日影詠つてゆく花あむ
 所くまはは信清まも長を回士
 人物めいゝものいゝな 彦
 控よあまゝとまあまのやうと
 水もたうまゝとま鞋踏あは
 言所、媒まゝとまむうし
 あの小まゝのまゝもアゝ
 軒まゝの撲あははあゝ

系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系

何れもまゝやらの書を遠ある
 村まゝのまゝとま月うら
 下まゝを碇はまゝ先也
 白髪も月娘まゝとま下も
 毛もまゝとま律まゝとま
 さう利も買つてまゝとま
 此四五丁とま話まゝの町
 へまゝとまむはまゝとま坪の
 祇まゝとまもまゝとま

系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系

不^レ以^レ言^レ又^レ於^レふ^レ居^レ夜^レの^レ醉
 酔^レの^レ解^レく^レ面^レも^レ雪
 正^レの^レ柳^レを^レ持^レぬ^レ里^レも^レな^レし
 杵^レの^レ音^レも^レま^レを^レき^レり^レ也
 月^レの^レ友^レは^レは^レの^レもの^レ連^レを^レ来^レて
 拵^レさ^レし^レす^レき^レい^レつ^レの^レと^レ鴨
 積^レ上^レ一^レ晩^レ宿^レの^レけ^レの^レ夜^レも^レま^レく
 つ^レま^レら^レぬ^レ寺^レの^レや^レう^レて^レふ^レを^レ寺
 こ^レら^レか^レら^レん^レと^レお^レき^レる^レ旅^レ日^レ記
 一^レ条^レま^レす^レま^レす^レり^レ年
 堪^レぬ^レも^レあ^レら^レぬ^レ吐^レぬ^レの^レ表^レ碁
似水
右年

水 年 水 年 水 年 水 年 水 年

夕^レ川^レと^レ甘^レ葉^レの^レ刺^レの^レ宿^レ役
 さ^レや^レの^レそ^レは^レさ^レき^レい^レつ^レの^レ船^レの^レ連
 ま^レつ^レは^レ暖^レ屋^レの^レ髪^レの^レ射^レける
 つ^レい^レま^レの^レ金^レ谷^レを^レほ^レき^レと^レ川^レも^レけ^レり
 糸^レぬ^レく^レと^レ吐^レく^レ帰^レる^レつ^レま^レ牙
 ま^レく^レそ^レの^レお^レと^レの^レお^レま^レく^レお^レ丸^レく
 ま^レを^レい^レに^レま^レた^レち^レぬ^レ梅^レの^レ香
 小^レの^レ舟^レの^レお^レま^レら^レる^レ船^レ連^レく
 は^レあ^レら^レる^レあ^レの^レ人^レを^レい^レや^レる
 お^レま^レら^レる^レよ^レい^レま^レと^レ夜^レ具^レを^レま^レく^レは^レれ
 遊^レぶ^レあ^レら^レぬ^レゆ^レら^レぬ^レ海^レ魚^レ
 打^レた^レら^レぬ^レ雪^レ路^レを^レす^レり^レと^レら^レき
下

年 水 年 水 年 水 年 水 年 水

○春

五

このおまじなをいふと、
ひよつとと、
鹿のさか、
柏平を、
向く、
四五粒の、
巨魁の、
侍の、
桶の、
未練、
照、
之、

水 水 水 水 水 水 水 水

下

ひらく、

水

踏、
お、
そ、
二、
新、
月、
深、
と、

水 水 水 水 水 水 水 水

羽洲

古

○春

六

孫連して材布の底を叩き
 涼しむる形戸あきの挑灯
 化粧箱と椀と立てた竹極子
 指を借らあちり空身
 あとあて月の降る雨の後
 秋め人きりと杜神家
 きつゝさるる持好の錦衣か
 飼犬もくも持る 追 従
 窓あておいてお身をもつた
 きつゝ山麓もあつた
 長閑いものさへも又も不二おし
 出の肩も持たせ 棒

友 阿 友 阿 友 阿 友 阿 友

下

狗盤も老も老もいもつた
 姑も種をささるるおめ
 けりけりけりけりけりけり
 かけらるる筆もさへさへ
 村の中を何れもさへ
 ちやうとちやうとちやうと
 常もまの如きけりけりけり
 情もさへさへさへさへ
 ひもさへさへさへさへ
 舟の底もさへさへさへ
 梳もさへさへさへさへ

友 阿 友 阿 友 阿 友 阿 友

○春

七

新雪帯 竈城の石路
雛のくめり 木の太枝
陽をまじり 石伸る石表
まゝのこぼる 石のよき波

友 甚 洲 友

下

有る子よ 冬 園 石 路
雪 石 路 石 路
き 石 路 石 路
石 路 石 路
振 舞 石 路

鳳 高
等 裁
雪 紀
裁 高

豆 売 舞 石 路
舞 石 路 石 路
行 石 路 石 路
止 石 路 石 路
夕 涼 石 路 石 路
月 石 路 石 路
葉 石 路 石 路
梅 石 路 石 路
初 石 路 石 路
長 石 路 石 路
石 路 石 路

北 高 裁 高 北 裁 高 北 裁 高 北 裁 高

○ 春

八

垣を登りて南をまゝ走ると東邊に
竹を削る人といふは隙の
花を飾りし人のいふお世に用
宿のこゝろをきく 町をうつらうら
な中へ 踏み事もすむ人
東と田舎をく 寝所りも
備はらまひこゝの園ひ草
を流し 雪のうきる
換を へそをひらき ぬき草
中へ 居まのきの屋たぬ実を
血紅をさし 汁ものりやふ
月夜遊びも 儂にゆくの

永機 休雲機 休雲機 休雲機 休雲機 休雲機 休雲機

干草を登りて南をまゝ走ると東邊に
ひく 袴を削る人といふは隙の
控打を削る 御世の道化り
田舎へ 酒をのりやふ
餅のたねひし 中へ ぬき草
手石を削りすむ 儂に
よの中をかくす ぬき草
結ぶお久き ぬき草
とやくと 田舎を削る ぬき草
よきういふ ぬき草
海を削る ぬき草 儂に
袖に ぬき草 儂に

機雲 休機雲 休機雲 休機雲 休機雲 休機雲 休機雲

○春

十

八つらろ心碓氷下りらる雪の路り
そり白らりしよよらね土苔つむ
中川の流いひるる河る ぬり
志のくしとまろふた戸を打た
生木跡の直道いふくく心らら
浦深く 孫持く 素ら
室の子らの心飛し 候も 順ぬを
方上向のよき 流る我ら
その月西の揚をい 舞舞し
雪下り 射るふ子白ふく心らりの

休機雲休機雲休機雲休

まらるる甲木いつろそそそ其の海
伸りし柳のみををすらりら
上流うすくハハ心まぬの暖なり
少りし 舌くも 刺のよら
月の出るまていころるの燈等は
心ゆらまらりの流うと 翻るる
又珠雲の流ををくくのもはまらり
な店くの株ハまらり 持する
眼尻の櫛の樹々 上這のり口
眉を刺して何れか心割
た 心らの葉の向も流ハを引ぬ

水蕉 水蕉 水蕉 水蕉 水蕉 水蕉 水蕉

涼しう月のさしあがる影
 天井しつ燦爛玉のありくと
 次矢の揚る鹿をみとせむ
 賑ひもる國松の向ふも
 櫻の影もさるる 大なるの囀
 笑初しく向ふは花の枝の
 日このあふ一口のさるるの都
 下野かけの旅をさるるの世を如
 少里議かけらるる海峯の練水
 紙よりの空をさるる呼吸さるること
 玉しつ少つさるるあふる
 肩のあふるさるるさるるさるる
 漱漱

蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水

さるるさるるさるるさるる
 麦畑と田の終む雪のあふる
 松の影もさるる山のあふる
 さるるさるるさるるさるる
 体めりさるるさるるさるる
 誰とあふるさるるさるるさるる
 つい鼻をさるるさるるさるる
 振るる様も板の響るさるる
 寂かなる石とさるるさるる
 あつうさるるさるるさるる
 白松のさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるる

蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水 蕉水

接し 園子の串の 西麻

下下

蕉

まきふさふさし 柔樹のちりく 竹

雪の 掃きぬき 梅の ちりく

陽炎は ぬらぬら けしき 細おて

春の けしき ぬらぬら ぬらぬら

うらやまの ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

海ら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

海の中 ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

すくすく ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

松宿

千山

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

たのしみ ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

顔の ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら

○壽

十三

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

山宿

なりそまゝに笑ふそめい暇もな
あつらふあまのふりなき ある文
暇もなきあまのふりなき 柏餅
此のふりなきあまのふりなきも
序より熱海の陸のふりなき 試えん
むらさきのふりなきあまのふりなき
近より暖るふりなきのふりなき
よりのふりなきあまのふりなき
坂より千才屋のふりなき 走る内
暇もなきあまのふりなきのふりなき
暇もなきあまのふりなきのふりなき
暇もなきあまのふりなきのふりなき
暇もなきあまのふりなきのふりなき

山宿 山宿 山宿 山宿 山宿 山宿

名ハあつくも女をたれ知る梅柳の
とくあつくも女をたれ知る梅柳の
あつくも女をたれ知る梅柳の
あつくも女をたれ知る梅柳の
あつくも女をたれ知る梅柳の

山宿 山宿 山宿

あつくも女をたれ知る梅柳の花
あつくも女をたれ知る梅柳の花
あつくも女をたれ知る梅柳の花
あつくも女をたれ知る梅柳の花
あつくも女をたれ知る梅柳の花

梅外 古外 碓外 梅外 行

ひとまゝにうらなうれし梅を
眼もきぬく結ゆき
己ら盤まはうる面彫
神ももを今月何の影やら
志をこころあき一袖のうらむる
けいせいの宿の回りのまゝ知れぬ
ましく仲とは舞ふも如
照つてくやう深き舟の色
日酒とのせと考へやはさ
多まる結まらざる結ある梅子
アとぬありする静のたりしき
掛函もつちして花よこらひ

梅 竹 碇 竹 碇 竹 碇 竹 碇 竹 碇 竹 碇

下

あつたこのまを雨さし竹を
梅を引きて蘭み水も
一寸白ゆはらるる 約 柳
うしろ懐いさるららるる 純 蓮
粒餅て世話ののぬり
高きうらむれと世をまき
佛具ら孫の何れは
茶席ふ志をなす年
口説上まら説くは
真しよ工合のまを
時刻ゆき豆を
稲妻の雲の中うら昇る舟

碇 梅 竹 碇 竹 碇 竹 碇 竹 碇 竹 碇

○春

十五

藁の巻く馬さといひつゝ
赤ねらる草も交る萩拵
土堤の岩れく杭を打じも
すれまを車をもろ多馬を
とち及れ主つりも世身の手
花ひららるるみの初を鈴まき
埜鈴は出き開ける春の日

竹 醉 梅 竹 醉 梅 竹

種く紙を巻ひらるる春の雨
凍のゆるみをと飲く石

明子
精信

きくか喘一峠の葉をよ如き
乾一脈を志めす葛湯
松枝をまけき月か澄わたり
色をよ失のふ鬼斬の乾
松つぎて来ても確の留をたふ
中纏てくるら 樹の破きと
風鈴の音は何れもやら物遠く
ねたらるるは春所の四ッ出
すぶあべとあお垂の口車
金とぬ拵拵くあつらき
些をくとも月もさしは春の穴
山を圍ののりは紅雲をまき

好 好 好 好 好 好 好 好 好 好

そとほひ梯を去るる打返し
其梯持て寺の名を乃る
中より田舎のたけきも花の如栄
蜻蛉戯せ輝く字を多く
まじくして返るやあま向ふ雨
木之枝折るる己の由り帯
おのろくく娘の粗ひより結女
あまのくく事くく誰か呼
川守の雪の遠慮も深埋に
船の先へはわく船ら
長持と又仰山を醫者の罵
牙匠待りまらぬくことささ

好岱好岱好岱品 岱好岱好

吼うる物り 流るる二文餅
風多き味何の秋のまき
三の月お鐘のからまー掃き山
まきと極く秋とく水つく
流るる位をこと 聖の名り言ふ
松ふお石くく念仏唱り
うおくくえりく 魚お餅し使り
里と村角のまらけくと梅
情むるも待たてや花の咲き
端まふくくも伸るる草

好岱好岱好岱好岱好岱

志きくくく八雨。函きぬ桜川
 色の蜷のきくくきく子 春
 銜車一匹一列るるふあし
 口さ—— 眼かハさ近き也
 十二夜つりて九月も月の船
 くと——も草のあきらお庭
 門さも襟のゆるる 江湖跡
 印彫るるを少——るおふ
 よ——るあはきくくあくら丸まら
 ちうつとの口もきくく小娘
 澄る河よりあはきくく眼也

永機
 素直
 直機 直機 直機 直機 直機 直機

下

するくくくきくく表直のふこ
 朝月の細ひ斗もゆるるく
 甚の中——馬のしゆるく
 活衣うささくくお吉のちき布
 ちあせのわらきくくく自由花
 花のちあせあてうき——き首 頸
 山荏の棠のこゆるあ松くら
 初雷はそのもちあきくくあし
 何ゆゆき船ちちも極果
 よあもせぬあし——何論——あ
 何個あ——誰もあてあは
 聲へのあし——あきくくあて

直機 直機 直機 直機 直機 直機

○春

十八

つるみり 園の建屋し
風はたし水たうふふ成り
採り葉は利め 板外
水はをうらう 島を白くするの月
蕨紙 一 雲くち泰の鐘
溜りつる水と水車
染る形も 師をこりり
はきも小袖くるまのき 一 ちまき
瘦るちねきと 二 ぼろのう下子
毛織をたせと 三 ちまき
只の衣も 一 ちまき
暖る向と 二 ちまき

直機 直機 直機 直機 直機 直機

砂の乾かもしまき 一 ちまき

機

國字物名とく品

あーのや^{大和}とーま^和を^和は^和な^和る^和は^和な^和る^和
羽後
うら^{丹波}ぬ^{丹波}は^{丹波}代^{丹波}を^{丹波}ま^{丹波}は^{丹波}ふ^{丹波}お^{丹波}空^{丹波}
口^{丹波}く^{丹波}は^{丹波}れ^{丹波}る^{丹波}者^{丹波}の^{丹波}小^{丹波}袖^{丹波}絶^{丹波}て^{丹波}ま^{丹波}え^{丹波}
下^{長門}駄^{長門}履^{長門}あ^{長門}ら^{長門}ふ^{長門}出^{長門}ま^{長門}き^{長門}ひ^{長門}お^{長門}え^{長門}
舟^{伊豫}う^{伊豫}ら^{伊豫}み^{伊豫}な^{伊豫}ら^{伊豫}と^{伊豫}き^{伊豫}ま^{伊豫}つ^{伊豫}ら^{伊豫}の^{伊豫}月^{伊豫}
ま^{尾張}つ^{尾張}も^{尾張}涼^{尾張}つ^{尾張}よ^{尾張}あ^{尾張}の^{尾張}料^{尾張}の^{尾張}つ^{尾張}由^{尾張}
博^{尾張}の^{尾張}土^{尾張}方^{尾張}を^{尾張}ま^{尾張}ら^{尾張}し^{尾張}冷^{尾張}し^{尾張}ま^{尾張}

官水
水禮 水禮 水禮 水禮

一海の静けさよ 肥後 ことよ 下
 仮住ひ 常陸 ことの徳を 志 送り
 経の 志 ことよ 下
 守 播磨 ことよ 下 小六節
 夕鶴の 土佐 ことよ 下 小六節
 さ 土佐 ことよ 下 小六節
 故を 甲斐 ことよ 下 小六節
 後引 日向 ことよ 下 小六節
 人の 信濃 ことよ 下 小六節
 よき 日高 ことよ 下 小六節
 ひ 甲斐 ことよ 下 小六節
 十 妻の旅 甲斐 ことよ 下 小六節

水禮 水禮 水禮 水禮 水禮 水禮

羽前 飛騨 ことよ 下 小六節
 一 周防 ことよ 下 小六節
 妻 飛騨 ことよ 下 小六節
 何 能登 ことよ 下 小六節
 何 能登 ことよ 下 小六節
 三 美濃 ことよ 下 小六節
 下 加賀 ことよ 下 小六節
 因 播磨 ことよ 下 小六節
 秋 伊賀 ことよ 下 小六節
 若狭 伊賀 ことよ 下 小六節

水禮 水禮 水禮 水禮 水禮 水禮

^{陸奥}むつりくと西首をひか也

^播たけりまきの大方は塩さく思ふ

^{和泉}下鳥のようりむさ蔵一の鱒屑

^{和泉}いつともつあゆるむの曙也

^{隠岐}汐干しおきの栲ぎの北風

夏の部

生らぬ川のふきのつゆより甘さ月

^和かきたの釣つ伝きまきお丸

産物のふねの魚のたま移りて

水 禮 水 禮 水

静 和

蓬 宇

和

こらまをみる、そのアかり、よき

法才子なる水仙小志舟り小

粉のまろく降りし雪ニニ寸

すけくまろくまのひ豆腐まきし

^和まろくうろつまも福重ハ栲ぎ

船もまきつまを何つと扱ふし

栲もはつれ、魚の御養

新くまの法とくをむける洗髪

結るけりまのしるさるる 月

棚の影くおきけし香くは

^和新もも子ともおりか禅衣

おきまへくしるぬよのけきまら風

和 宇 和 宇 和 宇 和 宇 和 宇

○ 夏

廿一

才天井一丁酒をさし日家
池のつらふ花つり市母あり
香のたをたをるるるるる也
る記のさるはや一の何階のた
たさるるるるるるるの先
ひとまゝくさるるるるるる
鏡ささるるるるるるのたさる
はあれあれさるるるるるる
ふらふらもさるるるるるる
る愛ささるるるるるるの世
記ささるるるるるるのた
鳴るるるるるるるるるる

字和字和字和字和字和字和字和

下

魚のむとふの標よさるは
雨ちつた月の道屋てんくくと
愛さるるの中へ虫のたさる
終時を猫背の尾は鐘街り
小便桶のこたれんとし
埃りのみささるるるるるる
糞のたさるるるるるるる
るあひさるるるるるるる
まゝくさるるるるるる

和字和字和字和字和字和

〇夏

廿二

ちきびせをの今世は
 つの川 ありその方ハ月
 月の床にありて 吟
 ちんねんよ 野ををり
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく

歌あり歌あり、歌あり歌あり歌あり歌

空を越えたる鳥ありて
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく
 ありてゆく ありてゆく

南歌 歌あり歌あり歌あり歌あり歌あり歌あり歌あり歌あり歌あり

傍にやるものさき大根
立吐きや叫のたらぬやら
とく持たぬの厚みあやふ
何れか之舟高のちり物
日影にとる舟のたさ
吹きやうはるる舟のたさ
申さぬとさうやけり持たぬ
舟のたさ存も持たぬ竹並し
往來のさき持たぬハ衣所
何とあつ夜の趣ものさうし
念ふ奥のさうの舟のたさ
近よれハさうさうの舟のたさ

歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌

舟のたささうの舟のたさ丸

歌

結さしと舟のたさ丸
塵とけらとぬさのたさ丸
軒並む高の舟のたさ丸
何とあつとさうとさう置土
月の照えと舟のたさ丸
船のたさとぬと秋の舟のたさ丸
江戸のたさとぬとさうの舟のたさ丸
和るはさうとさうの舟のたさ丸

松鳩
菫宇
池
宇鳩
池
宇鳩

知くあるものもやうに静候
城へけりまきて馬を引あふ
むをけんをい娘の邊にうつろて
菓多きや白ひをうろしは枯
わが舟のそよ紅くきゆる月
夢よりうろふゆめし一霍亂
兼學をもちいやくと巻て厚
甚ものるぬる身のか静さ
吾のこと存るかかして花心
はき結のをゆりよまきさる雨
おろきく驚く難きほなこはし
胎心潜くぬきよて伸まらる

池 塙 池 宇 塙 池 宇 塙 池 宇 塙 池

焼飯を包むははる火く
梅きり去りややく所い松
酌取の存るを志ろとよたつぬ
たきり一はら一のや一忘こ
鐘のなる氷きと近しおとろ
河武戸ちんそそそのろい船街
手枕のつねつあやく賽嫌ひ
虫きそ何たうま知陣の表
三の月の影を研まふし
著るのこそ著るまうし御辻宮西
貧乏のまけり木槿の佐かまう
舞舞ぬまうしまけり猫の子

池 塙 宇 池 塙 宇 池 塙 宇 池 塙 宇

何となく夕伸のあふ未刻下
六高市一とふる厚居り
花のさく少く是を多き指所
のふるふとぬく入たる来

宇池塙宇

船のちや茶山に入らぬと
園のちや茶山に入らぬと
水の底をふかす清く
影を照しと多き来らん
わらわらと笑ひて来らん

成雅
成雅
成雅
雅

焼飯を包むはて大に
梅を去りてやゆる松
酌取の春を志つと
さう——のや——志
鐘のなる氷を近し
阿武戸とてそのろい
子枕のつゆやく寒嫌ひ
虫をそよばせし
三月の影を研まじ
著のこころのまじり
貧乏のまじり木槿の
舞舞のまじり猫の子

宇池塙宇池塙宇池塙宇池塙宇

○夏

廿五

何となく夕伸のあふ未刻下
六高市一と久きう厚居り
花のさく少く是をき描所
のるふと船く入わる来

宇池塙宇

船の名や若草山と入らなとまた
園のふとらも種を疎ゆゆ
水の底若ふや石清らりの舟
船の若く一と多をあららん
やうとふと結り志んをを

成雅
舟雅
雅
雅

雲のふとらあふりあきと
此船のにはハハ沙洲の一の出来
かろく形されとえうととみれ
悉の舟細形地一人の大車と
ちとれかろくんと浮名またり
うせの物よとまけと治を引
往くうまを所の賑い
舟の尾波出ると舟のまいと
おろくと氷ま一と喉の鐘
うまの何とまけと座を揺いと
めくぬやうと上る酒を
小倉舟のむと引若る方を見

雅
雅
雅
雅
雅
雅
雅
雅
雅
雅
雅

○夏

廿六

在 枕の傍に寝るの儘はさうらうを
臨仕する子姑とせし振袖
出る月夜を河万の松の影
出る月夜を河万の松の影
此心肝と名の通はむうし海を
皆さきさきとそめさる眉
去らばけりまゝなるはあき
襦袢まるくはけりまゝ
燈をさふたたる細涼の志のひ道
牧場とあれ馬の心あぐ久
月高の粟の神は列らまじ
つしみの臨りあらまゝる

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

嬉しきと寝もかまぬ生々魂
路のかけらも古き生涯の徒
物さきき松とみまゝの花さし
春仕ふるは掃拂をまじ
百五近きまじらふやらの白雲
如きを物らさくは喉の代春
うん後ふ徳生のつらふ拵出され
十人まゝの寝のあつらひ
物さきもあき方丈の夜も白雲
雪のたきくよひと雪圍
夕まゝと寝のこまこまは
金一の帯りりしる残さし

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

○夏

廿八

換校の位を請々 程ひ事
 新しぬやうに書け樹立
 新しぬやうに書け樹立
 先立ちらふ事 傳是 山 扇
 恒海の樹をく 山 扇
 坂能多と 山 扇
 後別て世を造り 山 扇
 教てよはく 山 扇
 石のまゝ 山 扇
 とせん 山 扇

山 扇 山 扇 山 扇 山 扇 山 扇

下

加茂川 やすりく 物 山 扇
 六の 山 扇
 義を 山 扇
 呼れ 山 扇
 晴つ 山 扇
 勢 山 扇
 子 山 扇
 赤 山 扇
 清 山 扇
 と 山 扇
 へ 山 扇

十水
 北翠
 水 翠 水 翠 水 翠 水 翠 水 翠

○夏

廿九

月うらやまなく雲のきりぬ
牡蛎のきりぬ程々売徳て
あてゝるおのれおのれ古障子
まけの衆のどろと入じむ
とこまゝのてあうらん家の窓を村
追ふる海子きりぬむきぬさ探
いぬ船の船宿あつてやからまゐ
世とらうらとと頼むひする
大徳馬を揚るまゝとを徳取
よる石とらまゝぬそある也
白けまゝと用解まゝと思ひぬ

翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水

誰しもあつたにけりぬ
鳴とする虫あまきうてまのひは
まの藤あもむとある宵の書
稲のまゝと二階の手探ひやくと
新結時とわあつたしあ
只のひとあしとまのほしあ
傘をけりてやあつたあ
やうなま程成つたから車
よのつとあまの器あつたあ
あつたあつたあつたあ
なつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあ

翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水 翠水

○夏

三十

海。夏生好時。るる。夏

下

水

永機

一社谷

閑子きりけりるる多香山あうら
なすき清水の河まの茶の石
者酒をる鋸くさくさく
此のまにーささの痺る
とらまある時きハ目ま付力母の欠
お路も紙を布一の紙の
秋柳とけいひをよ赤くとも
戸帳の裁の古い布る

谷機谷機谷機

今年清くく区くく借を待あさ
空そと空をを知てある 母
中頃と五障の妙く目の替て
葉一の空も白川の雪
年しもさやれ九のの月
似て似ぬもの？ 飽と多之
つらくををささすこと書け
碧く空も温名橋のく
さうねるる初咲のむさく
揺くくさむさの初先
直うけし普法を匿いも借
只の二姑のそ楽 後るる

機、石機石機石機石機

○夏

三

好睡ひりのも 羅敷の生きた付
醉 けり けり けり けり けり
能の何る 存る 八爪をも 伝をともや
多の 靴の 細は なる 水 衣
小よ 色つ へん へん へん へん へん
あつ なる こと こと こと こと こと
軒 善い 善い 善い 善い 善い
盗人 盗人 盗人 盗人 盗人
そめて 何る 多 裁 控 へん 呼 度 し
帷子 榻 ち 名 子 へん 涼 へん へん
凡の 何る ち へん へん へん へん へん
へん へん へん へん へん へん へん

機谷 機谷 機谷 機谷 機谷 機谷 機谷

田 へん へん へん へん へん へん
日 へん へん へん へん へん へん
ま へん へん へん へん へん へん
於 へん へん へん へん へん へん

機谷 機谷 機谷 機谷 機谷

秋の部

登 へん へん へん へん へん へん
何 へん へん へん へん へん へん
早 へん へん へん へん へん へん
肌 着 の 靴 の こ へん へん へん へん

羊山 泉可 可山

確とある餅の種を湯に浸し
 尻のさけと草履履るを
 巾の首孤村とある種かたり
 白髪なると世のさか法誤
 堪のさかぬ者さかると腕
 鉄板水をうくひと榎の細く
 ちうさの代も法かぬと圓を
 明ぬくもつと戦く種物
 心と明と草を採も吹流さし
 雪うの用さく、扱方尺初菜
 甲子社世さ湯さく碎津を
 引摺り結を扱てあらく

山 山 山 山 山 山 山 山

月もさく種をさく東山
 現くさくぬく湯くさくひ
 種うをさぬぬくぬく現うり
 九く其のさくの毛種さくぬ
 赤あふの叫をさかるとさし
 小姓なるとさつとつさくさ
 ころの種のをさかるとさくぬ
 白氣首のぬきぬ種か針さ
 さかぬとさくとさかるとさかぬ
 さかぬとさかぬの法さかぬ鳴
 さかぬと砂ぬきさかぬ柱
 さかぬと眼ぬき水は法さかぬ

山 山 山 山 山 山 山 山

秋

三十三

すきしきくつりあひのるも月を以
屏風風使印をまゝまゝい冷
返事まら官書やうえあ秋の暮る
茶うく味はあうくこゝろる、
飯末のまじりまじりぬきつる侍人
の腹書用もまゝのまじりま
鹿のつる人もあうくく花をくを
細縁連なり極子孫重の粗

新龍のまゝまゝを秋深し

吐雪
山可山可山可山可

ひるかりつひるるまはあまの月
々々し馬路の上なるの石の戸か
とらふをやうてまじりまを拭
よあ都るる馬路て出船をのそく也
井一まゝるるまじりまのまのめ
いなり岩雪の小路にまじりま
りまの鉢子ハまゝるる海山
何所を確て馬路から雁野の状
ぬきまをまじりままじりま
まじりまのまじりまをまじりま
まじりまのまじりまをまじりま
まじりまのまじりまをまじりま

雪機雪機雪機雪機雪機雪機

○秋

三四

鏡をゆめくらふ心なきわすら
約束の境幸々を重なるし
め——粒三——で切張らすむ
中千生ハ情のふくら初さくら
雨さくらりの交る一瞬さくら
吉原部寛也そアそもの口のふく
小さる色てくさき風をな
明け嵐のちよんつと社つと垣根に
とこへさるさぬいふ雷
知りの枕まかりのころむ合
泪うせけい水くさる酒
木うししのころも面を揚る

機雪機雪機雪、機雪機雪機雪

浪り時つ島の氏神
層々のを理比留色の面々履ひぢり
夜と更とせとすり列し聲
月影くそころの草を揺る月影
松川さる船の渡り空
お露時雨あふる山おのこも也
ア毒のつらさをささむびら四
あまの終つとわくあつら様
禁てはわらわかなとく雪林
花の丸雪の水のさくら形ふ
うあつらさを新雪の羽

雪機雪機雪機雪機雪機雪

○秋

三十五

雨の後アエウ後とありぬ山の暮
 多々ぬ又月のこしとある 親
 松のぬめしし親の盛のを給めて
 しぬし「親」親くく余の可之ぬ
 つくけととを意以給りほしぬ
 まやあなめきしし京はおぬ
 さんししと親の親の相もらひ
 己刻 煙まよとしかぬ心下り
 頓病りのあいつを年と何するに
 袖とやとされい紫のちるなる

半仙
 下峰
 蓬宇
 仙宇峰
 仙宇峰
 仙宇峰

孫のばはたらぬ親の甲斐あるて
 掃一掃きの老翁くくくをばら
 ちぬの氷のくくくをわたりと
 多し海抄をばらぬをしし一親
 能くもとと四角甲の一人さうぬ
 祖所のまきとらぬまきお誌
 つきの時肥く快徳の付けぬき
 途申てあるまきの葉舟
 海を舟とらぬまきの葉舟
 まかるとらぬ名のまき 築山
 ちかぬし一ばらぬまきとゆりして
 神のいづもとまきのしし

峰宇仙
 峰宇仙
 峰宇仙
 峰宇仙
 峰宇仙

〇秋
 三六

かた川やるをあき水の味
甚まきいとも夕の下の下
世をやまき書ふ事久九坊之
旅も久まうし字う絶ある
漬ものよ銚茶漬のまらりと
内法ひくき世のころのま
出るあまかみはあうておかし
形なるとしけおみくし
中息子を撰をゆるぎぬ
習ふさき又ひたさく大
成るすも持てゆれのをとほ
盡のいともひのく古いあり

宇峰仙 宇峰仙 宇峰仙 宇峰仙 宇峰仙 宇峰仙 宇峰仙

長泊もあつ人とくわらん
心花の小きき 嶺りの数

宇峰

飛蝶もまらぬ情し秋のつら
も、以孫の圃回た反
名月の挿中う同あまやあし
・のそとけ時計いそとる若
水調、やましく川のまら海り
ちから厚らなほまを雪まつあぬ
振舞のあまのほをまをそ

筆我
雪兆
我紀我紀我
我紀我紀我

吃りせうきる 衆のたうき
 初 後 若くはよりか 説 御 名
 なりか 相 室の やまぬ 廊 庭
 比 又 流の 埒ひか 三毛の 一かき
 としより 口 赤い 石の ちるもの
 けの 程 落 ち 枝 伸 け 月
 角 力 け け も 夫 累 つ 子
 碓 礫 滌 け 碓 せ 碓 子 付 せ せ
 何 事 ぶ け け け け け け け け け
 せ け け け け け け け け け け
 春 の 様 様 十 分 ち け け
 祇 の 由 昔 所 あり ひと せ け

紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁

来るを け け け け け け け け
 狂 疾 け け け け け け け け
 梅 を 埒 け け け け け け け け
 砂 浜 け け け け け け け け
 御 所 け け け け け け け け
 結 締 け け け け け け け け
 か ち 采 妻 を 埒 け け け け
 人 波 の け け け け け け け け
 よ け け け け け け け け け
 種 け け け け け け け け け
 け け け け け け け け け け
 丁 寧 け け け け け け け け

紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁 紀 裁

初秋のこぼけのこぼれとて葱の臭
 月もさぬ方かそきとけの仕合を
 結ぶのちくる物も一呵らと
 待つらる其の出るの洞なり
 お湯を果てておろすき
 物もさける謝め
 け子の位なれ若かり
 ちつとける重なる切て
 おもひもさるる
 日は雲のさうして
 云とあつまる

浦、尾、浦、尾、浦、尾、浦、尾

下

あま秋歌

つまくと海にまよわ石の
 秋も名結の片に
 未結く近の溪を
 飲水とけく海に
 一人位結る事
 月給つる
 群
 山松の
 門の
 得の

永機

若、若、若、若、若、若、若、若

○秋

甲

花雪り何の所々夜の明て
きーのそ方高く何し能ふ

下
採

柙多し裾ぬりたる某山より
明透りたる弓張の乳
糸布も秋のたるうせさかた
底つけたるそ物の入口
日癖とて志あるをうし能ふ
曲りくくく何しつて能
法問のそする能をりつて能

大像
兼
併
像
我
能
像

おとくちやんと著る能押
中寄り形をゆりも能涼
おん事してつゝ能ある夕
角振てはるる一物なりき牛
子供とてさハ大も能とむ
芋のまきこみたる能中の月能
辭退のたらぬ区長月能
盃洗りも能く能つるし
そし鞋の能く成る能先
笑ふもことしも能所の能なる
多目的の能なる能なる能
陽炎の中も能生る古能

兼
能
像
我
能
像
能
我
能
像
能
我
能
像
能

互古禊そこのたうらうと連巴し
 釣るし一秤の女の心を
 某子履爪光かき実子て
 飼多き糖を振ふる也
 不の口を向く流は晴より
 啼しそひらくけりし時
 世を晴る禊し形けりしひつと
 身上入りし女房うつくし
 毛松く初る血本はの晴し
 盆ハ返りし涼むうら所
 月の出ぬしとる確のやうに
 夜は晴しし母のまのけりし

年機年機年機年機年機年機年機

混る者ありて花身なる菫の衣に
 土埃りまきぬ所は春の
 けしむ雨織りいと水紋
 ハ夏ハ運むもあはる廣く
 おりし所もて戻せぬ海
 大雪の初まにこまうと降あし
 ぬりけりしやうと鐘鳴り
 晴る又まきけるををを
 去りしとて法る椽の冬新
 つま描の香における機も
 せしめるおちりしせ針のある

年機年機年機年機年機年機年機

○秋

四六

春をさすの月からある青の口
 芒をさす馬のさうし
 約そまき勢のちきくかむはて
 ありとあまのけしけ又のけし
 ありの流深木上り山の上
 糸水唯ひの世よりよまこ
 けまねとあまのけしけのたのた
 ありとあまのけしけのたのた

年機 年機 年機 年機

都ももろろり形し相寄

松溪

心あふふふしあふのおとつれ
 もいづる木のきふ料のたふもふ
 ありとあまのけしけのたのた
 言ふるといふとぬあまのけしけ
 務栗よりと極るけしけ
 七十一の壱を視あふとあ
 姉妹まやうあまのけしけあま
 涼んさうあまのけしけあま
 かけあまのけしけあまのけしけ
 男ららららららららららら
 赤松たあまのけしけあまのけしけ

富水 水 水 水 水 水 水 水

○秋

四七

たらあゝ吾々、天を垂り
 祖師のうらり、下は、咲れ互の世に
 志をこころ、一の子をを存ん
 一は、此の口和、一花の咲きて
 一柳のそと、一水、此のわきに
 一の、背のうらり、一、咲き、を、露
 一の、通り、一、松、を、松
 一の、寧ろ、一、松、を、松、の、泉
 一の、留る、一、松、を、松、の、泉
 一の、静、を、一、松、を、松、の、泉
 一の、妙、を、一、松、を、松、の、泉
 一の、一、松、を、松、の、泉

下

水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 水

一、松、を、松、の、泉
 一の、妙、を、一、松、を、松、の、泉
 一の、留る、一、松、を、松、の、泉
 一の、寧ろ、一、松、を、松、の、泉
 一の、通り、一、松、を、松、の、泉
 一の、背のうらり、一、松、を、松、の、泉
 一の、柳のそと、一、松、を、松、の、泉
 一の、此の口和、一、松、を、松、の、泉
 一の、志をこころ、一、松、を、松、の、泉
 一の、祖師のうらり、一、松、を、松、の、泉
 一の、たらあゝ吾々、一、松、を、松、の、泉

水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 水

○秋

異

むら雨名尾むすこめぬ月の隈
中一ひひつら高きむしの書
よ者済しよあはれの所極の初見を
口ハ利も子と福ちけ人の
地境の一本銀若敷て、のこ
いつころ音のふきをきり
酒の録の書きはとくを著し方
屈とくの子を第一、さ一、の
二階中一とせよの出以のそつくと
卯のむ咲く、は後、け、

永機

一機一機一機一機一機

何の楊を裁き、近に居る道
人扱ひの高人て形し
月の上とて、おまか晴曇り
田を守るる家のうらなは赤く
秋のころもあま遣ひの山を焼く
舟の都名を聞出、して、お、
おまこも、花のひらけ、細響
こころもあま、く、も、つ、ひ、
あ、ら、く、と、あ、る、け、の、笑、の、山、の、け、り
甘樂るると、ハ、腰、の、戻、ら、ず
お十年き、の、馬、と、遊、ハ、こ、こ、
お、月、村、も、あ、ま、ち、ま、り

一機一機一機一機一機

一いつつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん
つらつとてきりて百あき貸てん

一機一機一機一機一機一機一機

茶汁も花見の数このて
いらぬ乃石の玉も。種地

一機

冬の部

裸布も浴衣もやター
まはらぬとて付田の野
道はあまの地地はる人の出
をといの骨もぬく月のさ
春はあまのうも。お後けき

晴雲
雪雲
春雲
春

下
 りあく唐を招ふ夥ある事ぬいせし
 家の方をこころしく下深の志
 家の口はあいなまをいそぎまむ
 承知つくとまそく不自由からる
 普清傳は風をさる官に對し
 祖阿の逢ふ息の礼建る門
 とうあるはそ年の月のみ旅旅
 米よあるとそ旅種いそぐ
 三葉とそ橋の家の後さそめ
 里終るつまをいそおれ晴
 一ひ終るまの花の咲きいそめ
 そあつく船のゆるる水に
 康 喜 雲 亦 喜 雲 亦 喜 雲 亦 喜 雲 亦 喜 雲

十
 疲孺も休めずおきぬ事あり
 ちとるふ袖をつとむ終行の子
 待合の服は門の物も
 不こころ見ゆるといふに
 護ある神あるとそあるは軍
 十の事とめいと皆あるは女
 後の事明く細い結をなす
 既 禁むいけりもあふい 交
 言すにそそあふに珠の禁外より
 まをさうれを護うある状
 ねるあふもあふまふとそ月を
 橋あふもいそぬ物か一
 康 喜 雲 亦 喜 雲 亦 喜 雲 亦 喜 雲 亦 喜 雲

○冬
 五十一

山雀も鶯もいよふ鳴り
思ひもなき水ぬ摺集の事
小鳥さふ懐かきもつて身も侍
思得しついでに持てる年
初冬の空に空なる花は夕明り
わづらひし面もさきむ苗代

雲 系 雲 系 雲

三三の我々の能也 相成桶
木の多ふ時角を神 くらに宿
鶴もあふ年あがる子供の喧嘩けり

旭扇
雲江
雲江

はしつゝさきと礎を 物さ
つら外の裡川も月影吐きか
すまといふさきしひよびの界
出代の河やれ物を著るさ有る
鼻さきしつら 大も列隊り
田舎の中も床はをこらへん
お郷はさきさきさきしる
親もさき佐比江はゆい
夏もあふ存とあふのさき
屋多柳のさけさき風の生さき
後をさきひうさき酒のさき
津 津もあふあれと所の旅さき

江 扇 系 江 扇 系 江 扇 系 江 扇

○冬

五十二

二階の極く控燈の
 去をうらみ花ハ笑うる
 市並の中さ山形尾を引
 揚そある雪雀の舌紅玉の輝き
 矢くら馬くんと吠るもの樂
 風車土産のちも久るくと
 心多子細るあり名のつる神
 洗つる髪くちのさきお六極
 尋すくましく久く反古うら出る
 空梅の外さ此ころちの船し
 去あはの本金の連を流し
 下穿しぬさるふ世むをまこる

江 春 江 春 江 春 江 春 江 春

財力のはさつて雲附帳つ
 よい晴のついで月の秋らき
 海をまらるるを隠れ初ゆ
 幅帯のひらりく知らぬに都
 銀の鏡あつてもまぬ時兼ぬ
 後のま車とらまをたお折る
 吹くまるとるぬ新う極極
 ちる花のこのけ掛るるをまら付
 両はらりとちほり行結

江 春 江 春 江 春 江 春 江 春

○ス

垂三

初め如く申す時と名のとらふ
形とひらつゝいふおちをた
ふあはるちをたふか系存信して
たふてふいふまき筆飯しり
たふしりふまき月の雲いり
舞ふあつたの障りそら
後さきいづく角カのおきくと
皆おちを人のうらからくり
書留して思ふよふのち土いふまき
徳をたふと志すと未小の台
夫うらら期いと思案の約の也

連水

水 魚 水 魚 水 魚 水 魚 水 魚

なな松をまきむまきこらる水
道はつぎ流しう月の影流り
小千の市の市と迷も海山
差をまきり利にあらぬまきり
門を格まよはるるあふあ
笑ははは花の白ひの若きうら
まきまきあはれか松をまきり
まきまき燈籠の旅探思ひや
こらま松あぬ石をまき
休らおお松といふあ海の子
つりての上は子供あつる
啼つてま松売所のかきり

○冬

五曲

水 魚 水 魚 水 魚 水 魚 水 魚

時節をさしし 雪は白くし
去るをさしし 餅の種を 中
長い吐きをしりも 出さ
深なるおちたき 糖をききて
糖の留まりをとりと 煎る
多きをとりて 餅を研りやうは 宵夜
いとぬるぬる ねるし しの 縁
引き口のつらさ へまう 味の
神のさき 法と 行をさしし
朝のさしりも 知れし 餅をらん
時分ののけ 場をさしし 餅をらん
さあさきし 餅をらん 餅をらん

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

餅をらん 餅をらん 餅をらん

水

初時節の餅を 餅をらん
白くさしし 餅をらん 餅をらん
餅をらん 餅をらん 餅をらん
餅をらん 餅をらん 餅をらん
餅をらん 餅をらん 餅をらん
餅をらん 餅をらん 餅をらん
餅をらん 餅をらん 餅をらん

湖水 青水 水 水 水 水 水 水 水 水

小葉の庵 湯をいそぐ 結露成
すねむもくくく せいのせいのせ
ちの上 枝の花の せぬくく
口長 志なき 陰るより 友

水 枅 水 枅

雲の松 如伊 吟を 吟て 秋時雨
冬より 瘧疾の 瘧く 可なる 道
斧 まいひくく なる方々 研し
忍びたり とももの 忍び しのび
茅 草の とももの 忍び しのび

羽州
常丘
素犬
抱明
柏英

雨の 如く 庵の 堰 妙なり 水
秋の 如く 湯の 湯の 湯の 湯
葉の 枅 木 なる あり なる なる なる
口つ ありの 有る 残る 大上 手 百
世の 如く あり あり あり あり あり
陰の 如く あり あり あり あり あり
役目 といふ あり あり あり あり あり
出の 如く あり あり あり あり あり
丘の 如く あり あり あり あり あり
大板の 如く あり あり あり あり あり
この 如く あり あり あり あり あり
秋の 如く あり あり あり あり あり

水 枅 水 枅 水 枅 水 枅

十
 掃一障のしく人神極の春
 まつりと欠とあるまゝの土
 糸一苗春も雪に減らせし
 法佛のまゝとせめて名を座の信也
 初とつの中北をさり雪
 牛とまおれもまゝおひつる也
 自由のまゝも飛く月花
 呼りよみ名をむらうの付えて
 新とせぬのはまをせぬを
 春のまの中とせしし掃つる
 春一掃とせしとせし掃つる
 ち向くと律を勝る月の照

明 丈 在 海 英 明 丈 在 海 英 明 丈

昔よりまゝありけつる
 踊るおを語の仕るはし
 傳るこころも志事傳の宿
 星の名おひるのまを
 ちよりくつるも見山
 花やむおの自かさるも
 春とあふ神とくく物矣

海 英 明 丈 在 海 英

只ぬまの物とありて
 雪を待て居

○冬

五八

季城
 旭高

淵馬と云ふ新も地より銅多し
人をききしつゝ身もつゝの
茶湯と云ふ如く月之の葉の星し
るるや保るるや如く新茶木
るのあはれをこめく地より
正直の如くつゝの成やると神
こつゝのあはれをこめく地より
地よりけく地よりけく地よりけく
まの氷は地よりけく地よりけく
つゝのあはれをこめく地よりけく
たつゝのあはれをこめく地よりけく

本 本 本 本 本 本 本 本 本 本

九十の如く地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく
地よりけく地よりけく地よりけく

本 本 本 本 本 本 本 本 本 本

○冬

五十九

名くまーし 楠くまーくまーれて
 心豊 豊くまーのまーくまー公達
 うら玉の心豊もふれ月代
 細くまー都くまーの通るまー世し
 拵くまーらまーの櫃のけけ
 湯くまーぬりてまーたぬ菜の味
 傍くまーあるまー夷もまーのね伴
 ほくまーの山くまー松くまーのぬ
 舞くまーあろろ日くまー水のまーあろろ
 ろくまーのよまーまーぬ水の 深口

成富成富成富成富成富

うくまー向くまー斗るくまー冠せぬまーのまー
 雪の日のまー雪くまー玉卵くまーまー坊
 形くまーくまーおひくまーけぬまー押すて
 後くまーまーくまーるまーを運くまーふこ
 もの影くまー影くまー月くまーの雪くまーまーるまー
 あんぬまー生くまーまーるまーくまーぬまーか
 まーまーぬまーまーまーるまーるまーる
 用くまーまーまーるまーまーるまーる
 かりくまーまーるまーるまーるまーる
 仲くまーの所くまーまーるまーるまーる
 葬くまー禮くまーの寺くまーのまーまーるまーる

真海
 十水
 水、海、水、海、水

とくはてはるくさき汗拭
 枝短啼く響る月のは
 矢舟のくさく材木をつむ
 皆ゆるく煙さきある 噴掛
 下さくさくさくハキキハ刺力
 中りいさよめくつうらもゆるむの河
 年一荒くくさぬよつ 雨
 角そのくさる淋き古都
 刺 瑞の位き店さきひり
 控行をせりいさ舟舟のこらよま
 吹をせりいさ時々と舟舟
 吹をせりいさ時々と舟舟

、水、海、水、海、水、海

のくさくさくさくさくさくさく
 結細くゆるす下うさるお坊
 研くく結ゆるさくさくさくさく
 吾思るタカまきいさよま二階
 人さきくさくさくさくさくさく
 飛あつてさくさくさくさくさく
 よくくくくくくくくくくくく
 月まきくさくさくさくさくさく
 噴吐くさくさくさくさくさく
 石垣の澄き波の打よまき
 甘菜葉有る門の出り結
 初花さくさくさくさくさくさく

、水、海、水、海、水、海

振うけりてさし白ふ思土

海

下

ぬれと樹も日のまじりたる時多し

中書

鴨立たるく原の片隅

祖康

取れず侍もひと先睡りて

むふ隣りハツ葉振る

月よそつあくる敷のころあ

あかてうらほさむかひや

終るも長くも秋のそよ一才

むう一あさきり屏角

原

海

原

海

原

原

海

原

いそぐも明けて満ちる花の綻

まの小さく後のあそこもそ

神うけと抱き傷もつけら

法衣の標ハ弁麦の草

休まらばおらぬ手もあはれ

駕もつとまの醫をも幸抱

履物とてん手仕おの法衣掛

ふ舞しくおあそびの世の産

月もいづれあそびもあそび

おまをさるあそびもあそび

切干を喜ぶも板石を先もあそ

一側うけりて積上げる梅

海

原

原

原

原

原

原

原

原

原

原

園肥り事ついでに此時
お暇——後無き事
好まらぬ身は
とくか
ま
欄
献
の
所
月
砧
寺
血

永永永永永永永永永永

一斗
通
の
越

永永永永

韻母

う
後
改

新
亭

松

永

石の形、積の外の弁も似し
 柄も多き、甲の叫さき
上の叫もあつておまゝもあつて、
 解も多き、純な、お城、
 胸をいとも、解も多き、お城、
お城のち、とお城、
 あり、お城、
 何れ、お城、
 何れ、お城、
 何れ、お城、
 何れ、お城、
 何れ、お城、

操 年 操 年 操 年 操 年 操 年 操

出さし、お城、
 油も、
 何れ、
 何れ、
 何れ、
 何れ、
 何れ、
 何れ、
 何れ、
 何れ、
 何れ、

操 年 操 年 操 年 操 年 操 年 操

山にさうしぬく歳子の縁まひ
 三布さく七ありまき板の板
 雨さめと後の月見ハ片目
 くらーおきそそ板に後
 秋原を田から掘もおき
 石ともいらくぬや隣の
 粉のさお粉そのまきよの
 建る杉戸の袖を川
 三ッ山の隠つる何よ花
 さくらら日曇りハ空る

縁 板 縁 板 縁 板 縁 板

追加

まさ山や陽のやぬのいさ
 山出碑く耕の柵
 と向うやぬさくく
 まう餅おくまき
 るあさつハ板さ
 十板ふまき
 サラわさの
 餅ハ
 子あゆくる
 ころりま

縁 板 縁 板 縁 板 縁 板 縁 板 縁 板

物依ちくまわうそらん
市子結垢りー
くるまの影を
瓦つき也
お母さん天降る
袴つとあを
切落く
隣るを教く
船りのつら
海へ出もの
五やあつ
ふひうくと

変 若 変 若 変 若 変 若 変 若 変 若

船行か
袖の陰より
わのも
されとも
花あとの
赤の
申
あ
車
掃
さ

変 若 変 若 変 若 変 若 変 若 変 若 変 若

五

柳籠うたもを在の地はけりて

川に堤を築く國あり

信濃の國吉田の里堀田氏よりて

る本より位ひし早し初

見のまの池にあり

五甲の道に釣りしやもかえりて

重と糸の糸を籠りてしもの

心事につけしは襟の糸を籠りて

あついであるいとあまをくし

あついで日とてあつく門をあて

下

交 菱

一草 復康

一草

康 草

康 草

康 草

康 草

康 草

+

いとゆゑのりては物なく一枚も

全七

久しきやもらふははのけを

すの身は袖のなまぬ舟より

新ぬゆ里をふむあを

豆のともなひまゝ織の縁つき

そそく従事し本坊の松

代る野に弘田の水けあり

ひらけし所くはあかの川

下移重のや言やする酒相

子供遊びひらけしあつて

月ゆつた花の咲りし秋

声よき蛙とれは北

いとゆゑのりては物なく一枚も

草 康 草 康 草 康 草 康 草

他村より... 神を揃く... 不詳... 痲... 邪... 下... 古... 大... 杜... 川... 衣

草 京 草 康 草 康 草 京 草 康 草 康

山... 利... 採... 山... 目... 心... 也... 草

草 康 草 康 草 康 草 康 草 康

西... 都... 人... 柳

有 川 徂 康 車 友 川

江戸の店々々餅

下

日ぶく借くう様も

ふらふらのりきあても

かましまい子も居ぬ

茶を飲たあくともく

雪國の位ひいさき

屏風をつむ燕の

何事もなほ結露

けふもあつてもあ

とるも電も極や

はやくハあきし

康

川

友

康

川

友

康

川

友

康

川

かちぬを乾む

水引アやゆ油

旅人の懐介

そめくくふ

膳扱を寺も

清さをぬき

雙六の夢の

細涼場の

アアアアアア

友柳を

アアアアアア

下

酒

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

康

友

川

康

友

川

友

康

川

友

康

九

更なることめ終りしは月
松の葉のふりしむのゆゑ
流霞の世話も終りの定むけに
きけいさくんと終の村の
限しきまじり思察のまじり
何れとせとぬくひりけり
まじりしみ度りて終の
海をみし— 空のぬき

川友川友川友川友川

かきしぬを敷むるは日
水川— ぬきしぬの— 玉
終人— 煤糸— して海
— ぬきしぬを田は
藤花を寄しぬきしぬ
— ぬきしぬをよい方、ぬ
— ぬきしぬの— ぬきしぬ
— ぬきしぬ— ぬきしぬ
— ぬきしぬ— ぬきしぬ
— ぬきしぬ— ぬきしぬ
— ぬきしぬ— ぬきしぬ

原友川友川友川友川

六九

世落目り多は聲下たる終

更なるこゝの物めしは月
おのゝ音あふりおのの音む
洗滌の世流るゝおのの音む
きけりさくくんと結の柳の
限してまゝる思案のまゝら
ほろろとぬくひらけり
まゝとゆきてみ廣うしてむの
海生り美し室のぬる

川友康川友康川友康

二十九の二十韻

此のこのをとりまゝ入梅花

無咳氣黄鬘
過海餘響地

いさふとてしを旅つ
程尺をまゝし騎り馬の上
おのゝ音あふりおのの音む
仰看月歌
流影霞

冥欠夢俊任真立

改一

高深沽鐘袖
 瀑凍弦冠緜
 可也庐山寺
 瘡...
 神夏森歌声
 浴後...
 月前...
 情...

立欠眞任 欠眞任 立夢欠

人...
 目...
 山...
 峯...
 木...

立眞任 後夢 眞任 欠眞

多 垢 離 盆 水
 鼠 奇 走 鐘 相
 振 舞 八 何 何 何 何 何
 考 其 後 漬 基
 吾 聖 謠 一 專
 月 々 々 衆 々 々 入 個 何 何
 以 口 口 口 口 口 中 の 新 何
 莊 影 甘 何 結 思
 赤 何 何 何 何 何 何 何 何
 な 何 何 何 何 何 何 何 何
 後 冥 欠 冥 任 冥 冥 立 欠

徒 然 閑 草 子
 逸 出 如 舞 鯨
 悠 屋 然 留 何
 殿 原 素 寂 兄
 何 何 何 何 何 何 何 何
 横 何 何 何 何 何 何 何 何
 懐 何 持 煮 豆
 口 得 融 煉 錫
 何 何 何 何 何 何 何 何
 後 冥 欠 冥 任 冥 冥 立 欠

錦促能花月
ちまうるおをむ今春

任欠

眞 紫野次庵真之

欠 江月欠伸子

多 天祐夢伴子

任 江雪任蓮子

立 江雪宗立

俊 伏川田喜昌俊

茶臼山養清寺行

破鞋子江雪一筆

とてしみるの節を

大江の月をいそいで

養清精舎の遊小弄日臨溪坐と

いとく遺愛寺の

閑寂石まうる風喫茶時

四段集子付表

晋永栞

別室の歌
 二百年
 前の連子由
 加 跋 換 韻 集
 其の集
 其の集

俳諧み、な押 其角著 全二冊
 俳諧同、く産 全二冊
 俳諧入、る歌 其角著 全四冊
 俳諧何、るの道 全二冊 近刻

明治十九年一月九日出版 同書二月出版

編者 晋永栞

南葛飾郡小梅村六十四番地

出版人 松崎半造

浅中區南町十九番地



